

8 7 6 5 4 3 2 1 0

60 59 58 57 56 55 54 53 52 51

70 69 68 67 66 65 64 63 62 61

80 79 78 77 76 75 74 73 72 71

1 2 3 4 5 6 7 8

書首  
孫氏物語  
卷之八





八

○河花宴事 延喜十七年三月六日し卯御記曰晚頭常寧殿看花金實頬令飲笛金兩侍臣  
唱歌臨會還清涼殿座東北廂參議保忠朝臣侍殿上櫻木請筵召大內記理平真内御書取勅解  
由次官諸薩幡磨權大掾孺正臣。文章生春酒善規及上恒薩藤原高樹等金賦春夜觀櫻花  
詩向郡基朝臣當轉子吉同預其座理平作子刺召理平讀詩訖給文人綿又鋪座階前玄上朝臣  
以下侍唱哥召備前从善行彈箏藏人吟藤原有時吹簫葉讚岐掾子兼彈琵琶保忠朝臣  
時之彈琴吹笙夜深保忠朝臣給衣侍臣絹息臥殊以安裝束給近侍管歌盃酒者數人  
延長四年二月十七日卯記日四日殿前搖花盛開仰石文人醉用花宴時暮音預令召可候今日遣使  
召常陸太守貞親王大臣有有賑煩不參申刻常陸太守親王參入同刻即歲人立倚  
子東又庇自北方二間敷管圓座两三枚於北階南箕貫子敷寫親王納言座稱樹下鋪座西面

爲文人座西刻左衛門臂藤原朝臣參郎着倚子令石親王藤原朝臣等郎參采侍座仰  
念召文人印文章博士公統朝臣民部太輔博文朝臣右中弁文江民部少輔諸薩侍內御  
書瓜大內記孺正臣以下文章生以上支參入仙花門着樹下座侍臣給紙筆仰食獻題藤原  
公統朝臣進昇殿藤原朝臣座前給之令出題自奏花房紅蠟珠仰又令上又書奏出之稱  
繫春日斜仰以後取上爲題又仰令探韵字右近權少將寶賴探韵奉上次親王以下就文  
臺探韵仰清平朝臣元方在衡維時尹甫木探韵令就進中座于時內藏寮給酒肴中納言藤  
原朝臣參入仰令探韵其後仰召樂取管絃者四五人時令奏音聲以助謳吟及子別  
終以取文臺以公統朝臣爲講師讀詩仰文人木近侍砂下令講其後管絃頻奏吟詠正仰  
給正館貢二刺入內侍臣退出度之花宴中延長四年例相叶乞探韵以下互相似タリ  
常陸太守親王彈琴及子別給親王納言山衣文人給綿侍臣及乐取人木  
給正館貢二刺入內侍臣退出度之花宴中延長四年例相叶乞探韵以下互相似タリ  
康保二年三月五日丙子今日有花宴事尋其由緒去正月廿七日掘東都櫻樹植南殿巽角白砂埋  
根朱檻迎來頂月之間遂日鮮明上達部余留此一座共憐其意自日中及夜半詠古詩誦新奇  
且以眺望且以愛耽而已但此間行事具見陣記以下略記 于時狀外記大江昌吉條陣座跡記之  
同三年二月廿二日御記云今朝立倚子於庭樹下即就花下座親王公卿又移座同樹北邊奏絃管  
行盃酌又召爲平親王令候座令伊平朝臣折花拂王卿頭其後延光朝臣跪盃立各詠和歌已刻入  
公卿等退出  
拾遺集天德三年三月内裏よ花宴せをひそむを條右大臣橘花シロヒツバトシモニカガ  
てより年の春とぞそへ

○花此卷ハ詞とて名とせり但卷の詞よハ南殿乃爲行宴セラセラホトウテ均の三条れにとく乃  
藤の宴のふよ花のえん一ひきとあれ、是よもて卷の名と花宴といふやとわらと傳む  
古來花のえんと、稱と龍事とひきとへ一作くは禁中の也れ、私家の人うど、  
うと南殿乃様の宴よりて名目とぞうと心得タキ也国史云弘仁三年二月幸神泉苑覽  
花樹命文人賦詩賜綿有冕ミツした一宴の益觴也トト源氏君十九歳官宰相中將正臣  
○弄花宴の時探韵例延喜十七年延長四年二月亦例也彼是度この例と兼用て此卷よ

花宴也花宴有舞樂之例天曆三年三月十二日有之地下舞人也上而堂上乃舞ハ  
うきうきと云々

細唐土は花といへ牡丹日本は花と云ふ稱也精宴花宴差別あり（トミト花宴の例）韻  
よくハシラテラナケ物語ハ彼是の例といひシカセテシモシテアリシハ（但延長四年の例）  
あひうきよを

。さうきの日余日南殿の孫に宴 河南殿ハ紫宸殿也 け木殿のつるぎによわう是大略草  
創よりれ木也 貞觀の枯といへと根よりりよもと枝と枝上御守奉糸是とまり枝葉  
再蘇て延長の御記みと群列桺樹東頭すとあり天德よりもううると康保元年十一月被植  
止まらぬ枯同二年正月よりううと三月より花あめうあ度うう一八重朋親王家樹一ハ西京よ  
マうアうふ其後度々焼已後より度うう者也

○后春宮細后八苏臺東宮以朱崖院也

○左右よりて 細 左右音よ讀也 南殿の東西也  
春官ハ左東よりし 后ハ右西より  
○ニキテ之の異名 細 藤壘より立后と云ふれ故と  
恨めて同座うべき也されども今日はありづれ也  
○行すとよ 河を折算也 或說折算殊也

花のえんは春の字と探得めり自然の華也  
みつひ容儀心しきよくとやくと  
つきよ頭中鳩細足せきねおもひぬまう鬼也

○そのへく、細ほ民は中将の外れへくをえ  
○皆あゝうらゝよ 花とくハ臆病也人のをくらう  
時ハトクヘカムモキモテ必鼻の上うきうくと  
スルヤウセ  
○地下の文人 河 吴音よりへうひせう是鳥見也  
うわれ物語 吹きもの下 え文人とも題めりて  
文まとまつる  
○うろくよ 石水貴人から各才学もくさき  
うとう

○アラシトコロノ庭  
孟子の庭上にその心  
心とぞアモモセ也

やどりがとひ 細詩の絶句一首作(ヨリ)ひとや  
シテうれと時宜みちわへひる也  
或被庭上ふ出て韵と探すひうへ安きひる也  
年老ひ細やうれひ功者ハ何とぞ思はる  
何事も稽古わしきよ也

袖人をとひと 河觀舞袖也

河  
水  
經

。たのやく 細萎よきりぬとく  
あきとくやうのひどくうれしが也

頭中將いつとく 細ひ糸がくとくの御衣の  
うくのあひてうれ、何とぞとくとあつ也  
柳花苑 河舊記云此樂舞圖婆羅門僧  
正將來女教也其姿如吉祥天女舞躙柔靜  
而已テ 賦御衣延喜延長例也  
弄上古ハ舞ありテ今ハ絶アリテ

。うるみやと細やうの内面整うとあつて、ハとて  
内へまじこして用意をあつしむやと也  
あらねりて花花宴の目殿上は舞又勅禄と  
ひきとあつて例也

○トヨタカヒコ 河結目 或掲目  
万水上達部とのくわしづかと夜のすうゆ  
つともとくわしづかとモスムと也

文也とくらむとくらむと 花詩と披講もくらむ 座中  
スコトテアラ文臺とくらむてか前よりく文人とも、  
階下もくらむて講頌もくらむ也  
ほ此君のいと、細とハヒ、花詩とハヒ心也  
句とよとハ、句秀逸のいと也  
じと孟講師も感よ堪て講一ひやどもの  
也下略

○中宮れり 細 中宮ハ藤壘也 東宮の女御やう  
の類うやうとひよそとよくアヘとそとがうと也

。こゝの處を細々我よりひともや  
。ゆきと也  
。御引之れ河覆

。大きいよ可り 細藤壺の事也心得ておきす。書奉  
あらうむ心と花より墨をもつて内使と云ふや思ひうつし

かくもとどかくすらすりほの  
みの声をうそえや  
てうじよのまづくセ  
ごのうふゆのうじうく  
うやのあつたを  
ひきふせんがんじもひで  
うきよはきんぼあひちの  
うきよつきてまええのせ  
あがくらむじくわ  
うかくさくわ  
うかくさくわ  
うかくさくわ

の。小神と申す。され  
半。がりもひよゆる  
モ。モリカエアタのあ  
ウ。ウモトシテモカ  
キ。キ津ぬぐ  
柳。柳を裁てり舞ふれの風  
ト。トうちどくしてが  
モ。モと。モ  
お。おりあめ。波音。お  
リ。リ。モモ。モモア。モモア  
ヌ。ヌモモ。モモア。モモア  
リ。リモモ。モモア。モモア

心花は候ともちうどもあつまきと義  
のともをばよよ心を盡りてやうゆきわぬのあらと  
せうと心得へし人ほ民の梁れまくらふよと  
ひよくわうと也大きさうあらうほ民の上と云ふ  
ゆゑすもあつまきと也  
心花もうちうきん細やうのすゞよがくはき  
すくね心ひとて有(き)ねと也草子也  
上達すとあく万水花宴もとのもの也  
河分散也又云領或抄退出也

○月ひとあく) 万水 二月六月の水をひす

。あくまでひまみ或抄 花宴よ夜ねきて上下の  
人々ひきてすやまとんづけかうんべのとひよう  
きよわくともひてりと藤壺こうどうを  
ゆひ也

うをあしよ 河默然不有ともすア万葉  
花れめしととくらきよりすとくちわくへ  
もくさうき 万水ひまくわしと也  
かそどゆ 河秘説云かうとのハ席字也漢語批  
みをくら三の口弘徽殿よ北南へかくとくす  
くあり是トヨオ三れろよあづ戸也格子違戸也  
花三字音よ可讀弘徽殿の細殿の戸三あづ  
三の間よあづ戸と云ふ也河海よ一ろ無相違

がれくえ 河くも本也くもぞとむて  
或てき戸とぞ号ふく也

あくそ 幸せよあやまちようるもとと也  
あれともほのこじひれあやまち、はくとと布し  
きく

人、アキラカして 或抄弘徽殿のサ房達かと  
皆わざて人をさせぬ時月夜一人古寺を  
吟詠してあづくら也

かくゆうとくらむとくわくを  
うちうびきうとくわくを  
のひくがよきあめすと  
ちあきうやくはうのひくが  
やうてまうのがくはくよ  
くさうとあくとくともせ  
あくとせのあくとくすと  
りとおいてやくのう  
のくとくとくとくとくとく

わからぬよ。河大は千里であると云ふのもそ  
然矣。

春の夜あかるくわくや

萬葉是トアリの異名と云ふ  
。こうくをよハラヤウ細川の字も清てトム也

花と蝶の元の字を承りて此處に記す

卷之三

○あるじを或柳 脱月夜也あまきら  
ノミヘテハラヒ也

○何うとうとき或樹源氏也何うとう

卷之三

。ゆき夜のす帰氏す也已愁心と付て可見也

うとうと月の夜をうつす月の夜をうつす  
へやうよらきる也す月の夜をうつす

勢うれ大きうみとえひるや  
威威跡角皮毛今ちくかく皮毛の見せられ

豆根の腰に背くしら、又は夜の馬の骨をと  
ちりぬてそれをうさぎうなぎうとも

三の音にて音三の根

差々人ひと万水人とよひぬ女めを也

まうかくふくよ細ほほの自讀よへりとく

れどされどとへ計略のなは也此人よとまへやう生之  
きくもゆうゆう或様何条事うあく人きせ

い君うりと  
細流をもまつてども

ひまくうきうち或枚深氏と知てうとゆき也

さをうみ也脚月夜の源氏ふらうへる人也

60

あひ四ちや或秋弘徽殿へ源氏の敵方より又對  
のうへあくまきつうよ解ゆらゆくもと

と或被継承者よりうなづけを

卷之二

西あべつゝ一 河周章又燿

ひそきこゆく細血後仰て申通まきを  
と毛万水其名とあそへ後もゆ丈と仰とあくよ  
まつえんと毛とそとせゆくよやじまそれへと毛  
跡月夜ゆふゆゆど氏いとまくうまれぬう一辰の覺  
の人といふ

テサカアセヨモ 腕月夜也奉きまサハ草の原もそ  
モトロヒシテキムタウヨクタリヒトアツハス  
スハヌホタマキモヤドウモチテテモ

きくにたゞすもゝる細流の辻也是へとう  
なうがううりと也きよさうそあうとも河海駅  
可然花鳥よがうくのうとく如何

既もとてといすりへきてはうきと陳へてうき  
あく心得ぬよとせこきう原小篠原也河海と云  
とあらも但こまても源氏と右大臣との争へれども  
く爲むたまうぬとくううとを  
。とくとういひよ「水女」の名とも名のてあるを  
とて源氏の心とモウ一ぬこと云ふ也  
或抄 賢スカス

うへの事つるね或伊弘徽殿の上局也直盧也  
こきそんの世とほもうへきよまうへく也

あきやうと花和泉式ア假名記りうべ人の扇と取  
うてとうきう又東坡詩云換扇唯逢春夢婆娑と  
作きう春夢婆娑の異名也唐末よひ婦の約  
とうとうちうよへ扇ととうううう有也

細昨日の花宴後朝され  
たやき也  
ゆきもゆきも細御寝貰ひて  
うろをまと或被花宴の夜ひゆうゆう油断され  
く多ひやきとひみすりとちとすらひてぬむ  
ひきもゆき不出也  
河突或被ゆをひそてキスモノ  
とほきて心持をすれ也

女房の心地もとと車前こきてんの女房ひよと  
まちうきへしとせ女子とわよとくえ也

。ヒトノヨリナシベキ 河言ウトツセ也  
或称文也とをヒトノヨリナシヤウトキ  
ナシモアリシ也と云也

るべと  
まつうのこゑうれ 細 河海葵上方のあられ  
也とうむ可然左夫に向ひ女方駄小屋ともを大  
大方へ如此女方うろくしきのうまさと有りて鳥  
くく鶯也花鳥の中宮ぬよとて藤垂のぬよわ  
未よあう然者葵上方のうとアラウトロしきも  
やくまうづるや 盆もやハ者也 故折者故  
うの日ハコネノ細後朝の品也  
花後宴といふ名目ハ男踏哥れ後二三月よりの  
結めうどいアラレと花のえんよ取りゆく也  
きうのと或被原氏の彈一也

さのあひとく  
細昨日の外處せりとへなむ  
ゆりやと也  
○藤壺は曉よ  
立衆の遊夜更てとく曉うよにと  
ぬよ奈波也  
○みゆりの細見物よ左大臣の女うちれあはり  
帰故してとちとうともせが也  
花四もろそとあらわみよよきよとく

せんぐとよすとくと  
てとくわくさんじとくづよ  
もくとくのとくわくたくべや  
うくよほきてくすくづみくの  
あくまくひこくあくかくまく  
あやとおがくくゆくくく  
おきのとくべとくくとく  
まくわくとくとくのとくとく  
まくわくとくとくのとくとく  
事也  
まくわくとくとくのとくとく  
まくわくとくとくのとくとく  
まくわくとくとくのとくとく  
まくわくとくとくのとくとく  
脚夜のとく

あうりつゝのゆゑとせり  
即ちとちかてありら  
まざせよれかをひきみ  
きんがさのやかが  
ねのとあはるのとくがどと  
うとせりとくが  
うがくはくとく  
六と春まよてまんと  
くうつをいわ  
づらふとくがりも  
おもふとくと  
脣日夜也

有明の月よ縁あつ事とも也

おまえよりまとて 細腰の退出よあひますて  
惟光良清アノ羽也  
わのちん花中の重ね陣ハミ輝門の方也  
うそつれもうて 或掛車のうそれ立てあり  
也うの車とくとく今かの陣トロ出るトロ也  
或取及くられてアソブとひつゝ如何  
ゆくの或掛弘徽殿ようきとせぬくらの  
里人退出也うの年よこきてん方の人々も  
四位少將右中弁 細腰日夜の兄弟也

○二きさんのがわづき 花がわづき  
退出するをとく  
万水二きさんれい流域也花鳥いき

細立六の君といつまくも  
てうきと  
えかきと也。孟頫の心也

○ちやくと細父大にかへりてとへじ  
○ゆきせひと也 或抄智聰うへりてとゆき  
○ゆきひと勝月夜の形の善惡とよほせん  
○さめぬはねふとも也  
○まご人のあうる細ゑゑく思案一念也  
○まごとそもて或抄此まつて絶果人なる  
○無念うるとも也

○姫君いふ 丂上の約よけくとまうら姫  
君とあるより 姫君れよタモヒキハサウセ也

○のとくの扇ハ細トクウタヒテ扇也  
様乃三重扇河清女納言枕草子より  
也三重かゝね扇五重よりわれハあまうりあつて  
檜扇の西方丸ノ三枚つとよもやうこそつて色この  
あるてともうて赤とあもしもひしよ結てふわら也  
五重扇より風情也 丂西端三枚と別くよをと

花様の薄様面白裏蘋芳也  
あらわきと弄常の物うれといふうううね  
うううとも人のひつひひくううう  
草のりと、細さきの要也

草のりと、細き事也。

世もちむ事花吉永僧正秀有明の目れゆゑ  
とあるあそう野寺のひがくへりりりけうを取  
てトあり也ほ氏とハキシモ取て可讀也俊成錦と  
ほ氏アラシシテんえトさんハ無念のタヒリ又花  
宴の巻ハ殊みどくれて艶うる巻也とも曰ひ  
細源氏の中より秀逸也五文字殊更妙也  
。わがいとのよ 細 菅上也

○乙君  
細紫上也

「アヒト、敢歎かざんせとくろを也

○らくにしおかと/or  
とそれほども

。男の山と云ふ細草子地也我は驚かれてよどみ  
うきんとあつむとうきてさやうるゝ男の山と  
あまうくされうやうつりやわくシト也

。此いのと細つて、源氏とちがひぬる。前のまき  
よもやまう。万水源氏墓上へ出で也。

。かくいとよハ細菴上也  
東抄源氏の心也。されど早速工出候ひゆくよ  
うしくと爲也  
。しきくと万水源氏の心也  
或抄源氏の心也。さうぞんがねうきのまこと  
也。もと臘月夜藤巣うよのまこと

河陽國光孝寧多醍醐 猶河海委  
河海花鳥說あり  
河海花鳥說あり

のことをせぬるゝ或掛ほ民の舞ゑぬと堪能  
うそとのゆれゆく諸事面白うじとく  
翁をやどく 売掛在大臣より。猪もひ出で  
心ありじと也 細別勘

○トヨトモの水をよみの存知とす  
となうしと昇下の釣也

○うとうとうわ乃所 細うとうと新まきむ  
心也公方の用うどよへ出づくとてうれゆる  
とくちよせは上手うどわくをめ出づくとて  
○柳花苑 細頭中将のまひびとあらの裏義

○あくとさゆ春よ細翁とかとくもひ出の  
（きとわにしやとよとてゆのうよおとくは立  
候アハ桐壺の代れわがうきわをとど

○弁中將弄丸大兵息也東本中將弁とあ  
支人玉也

君のあらわとれ君  
万水 脇月夜のゆゑよあひ  
ゆきとゆひぬ也

。尙月ハアヨ  
万水 胸<sup>アシ</sup>日夜のまゝアホ<sup>アシ</sup>  
ありアラアロハ尚侍君れ心也

あともうくハ万水右大臣の息モハ源氏モ  
アリ也  
トよゆく御み細弘徽殿カラタクレ也

。うちのどちら 幸踏哥の後宴也うちといつても  
一勘 定きつらるるよ、あとも藤花の内分うれハ  
如此とくわゆゆゆゆゆ也 花 小ちのわくひゆうて其  
結ふ藤の宴せんじ也 下略 花委

○藤の花は宴 花大やせすよもとて藤花  
のえんわう天暦三年卯月十二日あ香舍藤  
花宴よハ和哥管絃ホア  
○外のらうりうんとや河アララトとよき山里の桜花  
かうの敷たんのらうりうんと吉亭 花委  
弄キテ高モ後モさくまうとよアリヒトモそ  
シテアリ也

アラヤアラウの河ニキテ人の腹ハ官達也  
弄右大臣家ニシテ内裳着ありし也

○よのやうとて或舞右大臣とのまへ風といふわ  
ゆよもんへくちとぞもんづる行そえも  
えくめんをなはす也

ひとい門とて 万水 花宴の付禁中とて 右大  
きの源氏一派の付藤宴ひよか兼約すや

。あそせぬは或秋先日は約束八月一ノ日より慶氏  
今日出立をゆくひくとまつせう也

。もへうと 河光 宗

ゆゑの女将  
或抄  
夷臣

庄の息也

卷之三

我宿の事、万水、夷臣哥也大にけんうす、僕氏  
うまと、まうちゆきとまるとも是ハ一叶のむかひと  
云心也外のちうづ後よさをい也

内よおもじらかと或掛源氏禁中に居候よ  
此使ちりへふ、則天子へよあを送也  
。あううう、やうやと弄右府のすよ我宿を  
とかわつやううとくうをまゝまともとすと  
人内うつづくする故實あくきる邊すれは  
源氏君と賞翫の心うりへし  
。ううとあわると万水の門の山河や左大臣より  
との使われハモヤウム出をと  
。女くもうちると弄源氏のやくいれ女宮うちを  
おひき不うれハナクてのまみよハ思くと源氏不  
教給は相也右衛ハ源氏と心中ようぬ正うるれハ  
くうやあやせあふ也  
。あううひうと 河粧只行粧うみの花水原掛云  
男女裝束惣色也

様のうへき 武林様のうへき、面白キ、唐綺よ蘿芳の裏とづく也  
えひうめん、或掛 蒲萄染也 紫のうも色也  
あふヒテテ、細直衣布袴とえ出アラ也  
花あハ裙也 裙ハ妾のまこと云也 西宮掛ミ上龍  
直衣の下よ着下龍、隨便不常之事也。今ノ察  
袍よ下龍と重るとハ布袴ヒミ上、下用之事也  
直衣布袴ハ依時下略依人事也  
あふ河 鮎論語鮮宿日本紀 河委  
細もとをうきあ也。大君と云、弄歌王の妻  
やううと云、又云直衣婆と云、大人のすうと  
わううと云也。花直衣よ被とくもうとくもとちをす  
きとて、二猶花委  
花のうひも 細草子也也  
或被源氏よううと云也却而花の真をさぎ

○  
蒙古文  
細  
也

○袖口（そでぐち）といたり、かわす。弄踏（なげふみ）の時（とき）出（だ）てきみすと  
のとく殊更（ことがへ）りもとくととくともとくとく也  
一郎袖口（いちろうそでぐち）と、簾（れん）の下トトロサ房（さぶらう）にきぬ大袖（おおそで）と  
も也。今（いま）のせよと大饗（おほむぎ）の睛（はる）の儀式（ぎしき）れとまゝ牛  
きぬあい又車（くるま）とも袖と出（だ）も也  
○袖口（そでぐち）す河不祥（かふじょう）日本紀（にほんき）或挿（さし）源氏（げんじ）の心（こころ）不合  
きく花宋花物語（はなむつわものものがたり）枇杷（びら）との大饗（おほむぎ）の女房（めふらう）の袖口  
もくしく出（だ）きゆゑを小野宮大臣實資（おののみやおとこじつし）公（く）ハ難せ  
られり。ゆゑり。今（いま）の物語（ものがたり）も弘徽殿（こうひいでん）の女房（めふらう）とくらむ  
（くらむ）方（ほう）と袖口（そでぐち）と目（め）よろべり。出（だ）きゆゑをと済民羣  
ねきゆゑをとくらむて藤壺（とうこく）とよ、やまととくらむとくらむ  
くらむあり。和（わ）ととくあを也。

。うとよをくさを 河伊勢物語 うの花の下ゆく  
ひく多ありしよあらう藤のうとくと 花島委  
細花島況面白し 但えハ姫宮うちとうからる儀  
猶可然也とく  
ひきときひハ或妙引ひうむ心也  
わすれづり 細えよすづぬ女房のえ也を  
さみのむのと親類ゆくわいとれと

。やくしう、或抄此物と也房の事を語り  
乃ちそひ心也

。うにきや細此殿のやり事と云也空焼の事  
もさうぬと鉢虫巻よと乃ち悉皆へ用意  
とくとも也

○御まくらす或掛ねぬくよもぎさんへうとう  
二条石大凡斎方の風儀うやうせ

今めうまとと孟當世やう也

戸から、細官達の物見筋而已也

細賄月夜の夕也

。つまうんと或妙 五六君のアラタキアとを  
孟歎の中よ扇れ主へと也  
。扇ととくきて 河石川のこまうとよあひととれ  
てくまくわもる。いうまくすう花田の幸めあう、絶  
え。やうやく中へ他て 催馬乐石川呂 花浦氏君扇  
ゆうとあんためにとくとふ石川のこまうとア  
すととくきてくまくわもるとうてと扇ととれ  
てとひくと扇のゆへやうてゆえき故也  
。あやくとまくわもる花いとんとちくんハナキテ  
てほ此君のいひやまくわくわくとおうくとそゑ  
くわくこまくとくとくとくとくとくとくとく

あへと口ひて其へのふりみてうせら  
うせら

。あつまらすほ民也 河側覧月因 曹書  
。樟弓山、ある方のあつまらるる山とす。  
花々の緒ノ日、あつまらるる山とす。  
の夕月、有明のを細敵とす。  
かよへと細何、よまゆうとす。  
駆移しりへせそくらむとくとけんとす。  
トアモテ、すをよんとす。  
えきの細き、ほ民の秋と、と月夜の  
夕そえきひぬ、ね也。  
。ひり立、臘月夜也。花も、三月也。雪も、や  
やうち張月也。咸也。おとえ、ひよりん故、アモ  
アレとほくちの五文字、みからもて、はづく。  
いどふき花草の魚と、ともとやまとつひ、其  
の主と、ひきうさうさうさの結語の句を、  
うきうきうきうきうき、あれも、いきと六代君と、  
懸ふちふ心と、うきうきう  
弄ふ、あわい、うきうきうき、其の返すも、う  
ゑたまは不可然と、あわい、やまとじ残り  
。是又ほ民の性也。花鳥も其故有るや五六の間  
分明に、此外又心ありつと、も白也。此時の氣を

細花鳥說面白一但師說此結語返手と一捺すハテシカハれど其の意よりて、  
ちとぞくしくありやう也是源氏君の性也いつくも其心あり凡世物語の中より此卷を  
きてもよし也後成脚六百番のす合ひ判すも紫式部すとえがへとどうもやく筆ハ殊勝のうへ  
花宴卷ハと小艶うるもの也

